

[巻頭言]

情報システム学会は社会に役に立てるか！

松平 和也

浦昭二先生の情報システム学の定義は、以下のようである。

『世の中の仕組みを情報システムとして考察し、その本質を捉え、そこに横たわる問題を究明しその有様を改善することを目指す実践的な学問である』

さて、日々、報道される世の中の状況は、問題だらけである。同じような問題が繰り返し起き、改善される兆しもない。その中でも、私が最も心を痛める問題は、小中高生のいじめられ自殺である。この事案には、関係者が多い。先ず、虐められたその子供の友人、親、保護者、担任教師、学校の校長、教頭、スクールカウンセラー、養護教諭、教育委員会、隣人達、さらに、民生・児童委員、地域首長、文部科学省、そして、教育学者、報道関係者。

いじめ防止対策推進法が2013年9月には制定されている。そして、未だに、決定的対策が無く、無力である。

この問題に向かい合う、情報システム専門家はいるのだろうか。いじめ防止対策推進システムが構築されて、データベースが充実しているという話は、寡聞にして聞かない。

また、同じ老人として、老老介護者の悲劇的

事件、認知症老人が線路に入り込み、死傷したら、鉄道会社が巨額の損害を補償しろと訴えた。さらに、近所での独居老人の孤立死、徘徊老人が、足もたのおぼつかない歩行で、交差点内で渡りきれず、交通事故死したなど。再発防止を念仏のように唱えても、防止できない。とにかく、介護に疲れきって介護対象者を殺して、自分も死のうというのは、哀しすぎる。日本は、子供や老人を大事にできない国家になってしまったのであろうか。

このような、世の中の仕組みに切り込み、スーパーマンのように問題を解決し再発防止策を導入できる“情報システムマン”はいないのか？人工知能や強力な電子計算機を道具に持ち、インターネットをふりかざしても、無力なのであろうか？

“心を持つ人間”が絡む問題には、情報システム学は効果的ではないのか。情けに報いてシステムを作るなどと義を掲げ、人と人の間に放置された無力な人間にとって、優しくない仕組みを、改善する勇気は無いのか。いや、そんな方法は学んでいないので、我々が扱う問題ではないと、居眠りを決め込んでいるのだろうか。我々が無為無策で、このまま放置しておけば、国家の英雄、安倍首相が見事に解決してくれることが期待できようか。

ではどうするのか。

社会学者たちに任せてしまうと言う手もあるが、今こそ、情報システム学会の知能を総動員して、浦先生に示された情報システム学を掲げて、勇気を奮い起こしたいと考える。先ず、

Kazuya Matsudaira

情報システム学会 監事

[巻頭言] 2016年2月20日受付

© 情報システム学会

考えてみて、IT とか、インターネットなどは何処に適用できるのかである。解決の強力な手段になるのであろうか。人間が心を持っているから、難問が横たわっているのである。心との対話方法や、心にあるデータや情報を如何に表現するのか、ダイアグラム化する方法はあるのか、再検討してみよう。心はアウトプットなのか、インプットかもしれないし、もしかしたらファイルなのだろう。ファイルだとすれば、大変頼りないファイルでもある。いじめの解決に至る情報処理の流れを描けるのか？自殺する小学生の心に、いかなる情報が去来するのか、蓄積された悲しみはどのように表現するのか、それがわかれば、自殺を思いとどませられるの

か？虐めている子供の心には、何が蓄積され、何がアウトプットされると、虐めをやめて、普通の学生になれるのか。イロイロ、試行錯誤をやって、情報システム分析をやる価値があると考え。我々は無力ではないはずだ。

最後に、付言しますが、他の学会の方に、我が情報システム学の定義を示したら、プっと、笑われ、無理、無理と小声で言い、もっと狭い定義に変更すべきでしょうと言われました！！そーか、この定義を変えてしまえば、狭小な定義にしてしまえば、悩むことは無い。でも、浦先生に、あの世で顔を合わせたら、知らんぷりすることになるが！